

平成24年度の事業報告書

平成24年4月1日から平成25年3月31日まで

法人名 特定非営利活動法人モーストの会

1 事業の成果

当会とイランの化学兵器被害者支援協会(SCWVS)の9年間の医療・平和交流で、両団体が毎年、二国間の行き来を重ねる。ことしも8月5日～8日、SCWVSの毒ガス被害者と医師ら10人が広島を訪れた。

8月5日、宮島の広島経済大研修施設で歓迎会を開催。イランを学生時代2005年に訪れた同大卒業生と安田女子大学生らが参加し、イランの被害者から毒ガスの被害について聞いた。

6日、一行は広島平和記念式典に参列。その後、平和記念資料館を見学し、前田耕一郎館長を表敬訪問。午後は恒例の「被爆者との対話集会」を、毒ガス被害の医療交流に携わり「マスタードガス傷害アトラス」の監修者広島大井内康輝名誉教授の事務所で行った。被爆者の一人は、2004年、新聞社の被曝60周年特集でテヘランを訪問した際、テヘランの病院に入院中の毒ガス被害にあった青年から「世界は毒ガスの話を知らないので伝えてほしい」と頼まれた、と語り、イランの被害者は熱心に耳を傾けていた。

7日は、大久野島の毒ガス資料館を訪問。わかりやすくなった新しいビデオ鑑賞後、大久野島の毒ガス犠牲者の慰霊碑を訪れた。夕方、広島市松井一実市長を表敬訪問。松井市長は、9年連続式典への出席と、資料館前田館長のイラン訪問の際のお礼を述べ、被爆の実相をより多くのイランの人に広島に来て見てもらいたい、と語った。テヘラン市のベヘルーズ・レザーイ副市長は「(両市は)大量破壊兵器の被害を受け、わかり合える点が多い」と述べた。

一方、9年間の毒ガス被害者治療医療交流の集大成として、両国の毒ガス治療を行う医師らにより「マスタードガス傷害アトラス～マスタードガス曝露被害者の救援を通じたイランと日本の架け橋～」(314ページ、25人の著者による図説集)が9月29日、完成した。

10月1日、監修者広島大井内康輝名誉教授や当会津谷静子理事長らが在京イラン・イスラム共和国大使館(港区南麻布)を訪れ、レザ・ナザルアハリ大使へ、アトラス600冊を謹呈した。井内名誉教授は「交流に関わった両国医師らが各章の専門分野の原稿を執筆し、それを英・日・ペルシャの3ヶ国語に翻訳…」と説明。井内名誉教授によると、アトラスの中には、これまで未発表の論文が掲載され、また毒ガス被害者の家族の苦しみや、医療救済制度が克明に記されているため、イランの毒ガス被害の医療実情を、この本を通して世界中へ知らせるべき、と述べた。この日、会見に同席し、自らも毒ガス被害者のホセイン・ヘシャマティファ公使は「90年代後半、日本在任中、日本人の平和を希求する心を察し、SCWVSのシャリエール・ハテリ医師に、日本の毒ガス被害者と連絡をとることを提案した。ところが日本も大久野島で毒ガスを製造していたので、話は進まなかった」と語り、さらに公使は「歴史は変わり、過ちは反省と新たな行動につながる。戦争は終わり、新しい時代を迎えた。日本の平和文化をイランへ伝えようと訴え続けた…」と言う。当時の公使の訴えが、アトラス出版の道筋の第一歩だった。公使は「アトラスは学術研究書としてだけでなく、平和を愛する心を世界中へ広める本。イランの被害者に代わりお礼を言いたい」と語り、「今後も対話によって信頼し合うことが大切」と述べた。

ナザルアハリ大使も、「両国の友好関係は、人的交流が礎となっている」としめくくった。アトラスは1200部印刷され、日本国内外の医師や国際交流機関、大学教授などへ配布された。

これを受け、アトラス出版記念式典出席のため、1月18日～22日、井内名誉教授、当会理事長ら5人がイランを訪問。19日テヘラン到着後、アトラス増刷や日本へ平和教育を学ぶためイランの教師を派遣する計画、来年交流10周年を迎えるにあたり将来の方向性を見据えた会議を行った。

20日、テヘランピースミュージアムで「アトラス出版記念式典」が開かれ、日本大使館文化担当官や執筆医師、毒ガス被害者やその家族約100名が出席した。SCWVSのアリ・レザ・ソルシュ会長から9年間の交流の紹介があり、当会を通じ大学の交流では得られない文化交流を継続し、アトラス

完成後も活動を進めたいと語った。井内名誉教授が、アトラスプロジェクトについて、医学を超えた人道を含めた交流の成果であり、アトラスが世界平和に貢献することを願うと述べた。その後、アトラス除幕式を行われ、当会理事長が、これを機にみなさんも新たな決意を持って欲しいと語った。

東京の㈱クロスメディアの依頼で、乳がん検診啓発のため「余命1カ月の花嫁」上映会を松江市で平成25年3月8日開催するため協力。